

連においては他のソーシャルメディアによる活動よりも芳しくないものであった。ある「震災関連」に登録されたキリスト教系コミュニティは、身元保証のために本名と所属教会を自己紹介欄で名乗ることを原則としたが、匿名文化の元に成長してきたmixi内で本来の身分を開示する行動は多くの人々にとって躊躇させるものである。内面的対話の場としては有効的に活用されたが、物資支援等の現実的な行動に対しては、mixi内の匿名性は弊害となっていたようである。

Twitterでは、ハッシュタグ（#）を付ける事で用途に合わせて発言を集積することができ機能があるが、震災関連や震災に関する宗教者の情報関連等、目的別のハッシュタグを設定して情報の拡散と共有を促すと共に、自身のブログでもハッシュタグの宣伝をして認知度を広め、情報提供を呼びかける動きがあった。これは元々ブログなどでの情報発信に慣れていた僧侶や牧師の中で散見された。宗教情報に関するハッシュタグを設定し、それを広めて定着化させること自体が、無数のツイッターの中から必要な情報を抽出する基礎づくりとなる点、集積され保存された発言群は、今後のための情報としてアーカイブス化に貢献するという点で、こうした行動も目的に合わせれば宗教活動として援用可能である。

Facebookは今回最も特徴的な役割を果たした。Facebookの災害時における教団コミュニティの可能性については、ロビンソンが「救援活動員同士の情報交換」「リアルタイムな報告とやり取りによるコミュニティ内の連帯の強化」を指摘しているが、これに加え同じ活動報告でもTwitterとFacebookで

は閲覧側の印象が異なる事から、コミュニティの可視化による外部からの活動理解も期待できると考えられる。

また、地元の最小単位の教会（寺院・神社等）でのFacebook内コミュニティ形成は、万一の非常時に際して即時に安否確認をしたり、遠隔地へ移った嘗ての同胞を迎えるような、寸断された地縁の回復の場となる可能性も確認された。

コミュニティの可視化は、教団内部の情報開示を意味するものではなく、活動をしている人の「顔」やそのコミュニティの「姿」が見えるという事である。そうしたものが見える事で、初めてネット上の宗教活動が単なる「情報」を超えたものとなり、宗教理解の一助にもなり得る事がFacebook上の多くの宗教活動を観察して得た所感であった。

建学の精神と被災地支援

——宗教立大学のばあい——

弓山達也

本報告の目的は、宗教立大学における円滑な被災地支援に、建学の精神や設立教団との連携がいかに寄与するかを検討することにある。そのため都内の宗教立大学一校（國學院・駒澤・上智・聖心女子・創価・大正・東洋英和女学院・武蔵野・明治学院・立教・立正）を対象に被災地支援の現状をウェブ上に公開されている情報と面談によって調査した。

ところで宗教立大学において、建学の精神と被災地支援との関係は二つのジレンマを抱えている。第一に宗教の社会貢献に

もいえることだが、宗教的理念と社会貢献との関係で、理念が強いとボランティア従事者にも対象者にも警戒心をもって迎えられ、一方で理念抜きでは宗教立としての独自性が見いだせない(例えば教団の震災支援については山折「宗教者の役割を考える」、中牧・対馬編『阪神大震災と宗教』八七―九頁)。第二に宗教立大学における被災地支援を教育活動の一環ととらえる、待ったなしの支援が必要とされる中、広汎な若い力(学生)を組織し、運動として被災地に送り込むのか、それとも自校教育や建学の精神の涵養を通して「共通の価値」(山下・管『震災ボランティアの社会学』(一五頁)を反芻なり今一度確認するなりして支援に向かうのかという価値と共同性の間のジレンマである。

被災地支援に限らず、宗教立大学が社会活動に乗り出そうとする時、宗教的な理念や実践や組織とのリンクが模索される。先の一校はいずれも建学の精神や設立教団との関係の強弱はあるものの、被災地支援に何らかの宗教的理念や教団との連携が見られた。ガイダンスなどの対外的文書で建学の精神が押し出されたり(上智・大正・明治学院)、設立教団との協働(國學院・上智・聖心女子・武蔵野)がみられたりした。また震災と津波による二万を超える死者・行方不明者を前に慰霊・追悼・祈りの行事(國學院・上智・聖心女子・大正・明治学院・立教)が展開され、これが宗教的理念である建学の精神や宗教行事と結びつきやすかった。被災地において参拝や勤行(大正・武蔵野)がともなう形態もあった。さらに余震や放射能問題などが大きく取りざたされる中、現地に学生・教職員を

派遣するにあたっては、大学単独の事業よりも、設立教団内のこうした社会活動に長けた部署との連携が模索されることは、むしろ自然なことであろう。

しかし実際のボランティアで理念として建学の精神が意識されることはまれで、慈悲や愛よりも、むしろ世俗の論理が――例えば「心のケア」を説く際も宗教的な救いや癒しの意味ではなく、心理的ケアやカウンセリングの文脈で語られる傾向にある。ただ被災地支援に建学の精神が無関係であると断ずるのは早計かもしれない。報告者の本務校(大正)で被災地支援に赴いた学生の帰宅直後のレポートを見ると、①「復興へのお手伝いが目標」「無事であることを祈る」、②「震災体験を伝える義務・使命」「信じる力を強く持つこと」、③「正しい情報をしっかり得る」「焦らず冷静に考え最善だと思った行動をする」、④「助け合って支え合って生きている」「自然に生かされている」と、この大学の①慈悲、②自灯明、③中道、④共生という建学の精神に対応する内容がいくつもつづられている。山下・管(前掲書、二七二―六頁)は阪神淡路大震災の際のボランティアが市民的公共性を掲げて動いたのではなく、むしろ「何かをしたい」「助け合い」意識が実践を生み、日本語としての「ボランティア」観とボランティアシステムを醸成するに至ったと、理念に先じた行動がやがて理念を育み、豊かにしていくことを指摘している。建学の精神と被災地支援との関係も、設立教団との連携や学内の宗教行事とあいまって、前者が後者の理念になるというより、後者の実践を通じて前者に内実を与え、といった方向性が確認できよう。